

教令

一般ローマ暦における「教会の母聖マリア」の祭儀について

現代の教会は大きな喜びをもって神の母を崇敬しており、キリストの神秘とその本性について考察するなら、一人の女性（ガラテヤ 4・4 参照）、すなわちキリストの母であると同時に教会の母でもあるおとめマリアの姿を見過ごすことはできない。

このことはある意味で、聖アウグスティヌスと聖大レオが先駆けて語ったことばを通して、教会の心の中にすでに残されていた。実際、聖アウグスティヌスは、マリアはキリストの肢体の母であると述べている。それは、信者が教会のうちに新たに生まれることに、マリアが愛をもって協力したからである。他方、聖大レオは、頭の誕生はからだの誕生でもあると述べて、マリアは神の子キリストの母であると同時に、神秘体すなわち教会の成員の母であることを示している。こうした考察は、マリアが神の母であること、そして、十字架の時に頂点に達したあがないのわざにマリアが深く一致したことに由来している。

たしかに、母は十字架のもとに立ち（ヨハネ 19・25 参照）、わが子の愛のあかしを受け入れ、永遠のいのちへと再生する子としてすべての人を最愛の弟子の名のもとに迎えた。こうして母は、キリストが十字架上で霊をゆだねることによって生まれた教会の優しい母となった。さらにキリストは、最愛の弟子のうちに、すべての弟子を母に対する自らの愛の奉仕者として選んだ。キリストは母をこの人々にゆだね、こうして彼らは孝愛をもって母を迎えることができたのである。

生まれたばかりの教会の優しい導き手として、マリアは聖霊の到来を待ち望む使徒たちとともに祈り、階上の部屋で自らの使命を果たし始めていた（使徒言行録 1・14 参照）。この意味で、敬虔なキリスト者は時代の流れの中で、たとえば弟子たちの母、信者の母、信じる者の母、キリストにおいて新たに生まれるすべての人の母など、さまざまな称号をもってマリアをたたえてきた。また、同じように、霊的著作家の文章や教皇ベネディクト 14 世とレオ 13 世の教導職において、「教会の母」という称号も用いられた。

福者教皇パウロ 6 世は、第 2 バチカン公会議第 3 会期の閉会に際し、1964 年 11 月 21 日に、聖なるおとめマリアを「教会の母」と宣言した。「それはマリアが、信徒であれ司牧者であれマリアを最愛の母と呼ぶすべてのキリスト者の母であるということである」。そして、「すべてのキリスト者が、最も甘美なこの称号をもって、今後いっそう神の母に敬意を払い、取り次ぎを願うよう」定めた。

したがって、使徒座はあがないの聖年（1975 年）の機会に、教会の母聖マリアのための信心ミサを提示し、これはその後『ローマ・ミサ典礼書』に採用された。使徒座はまた、ロレトの連願にこの称号による嘆願を加えるための権限を付与し（1980 年）、『聖母マリアのミサ集（*Collectio missarum de Beata Maria Virgine*）』の中で他の式文を公布した（1986 年）。また、使徒座に申請したいいくつかの国、教区、修道家族には、この祭儀を特殊暦に加えることが許された。

教皇フランシスコは、この信心を奨励することが、司牧者と修道者と信者における教会の母性の感覚の成長とともに真正なマリアへの信心の成長もいかに大きく促進するかを熟慮して、教会の母聖マリアの記念日を、ローマ暦の聖霊降臨後の月曜日に記載し、毎年祝わなければならないと命じた。

この祭儀は、キリスト者の生活の成長が、十字架の神秘、聖体の晩餐におけるキリストの奉献、そしてあがない主の母でありあがなわれた者の母であり、神に自らをささげたおとめであるマリアに固く結ばれていなければならないことを思い起こすために役立つであろう。

したがってこの記念日は、すべての暦、ならびにミサの祭儀と時課の典礼の典礼書に記載されるべきである。関係する典礼式文は本教令に添付され、司教協議会によって準備され認可された翻訳は、本省による認証の後に公表される。

教会の母聖マリアの祭儀が、局地法の規定に従って認可されたより高い典礼上の優先度をもってすでに特定の日に祝われている場合、将来もその祭儀は同様の方法で祝うことができる。

以上に反することはすべて退けられる。

典礼秘跡省にて、2018年2月11日、ルルドの聖母の記念日

長官 ロベール・サラ枢機卿

次官 アーサー・ローチ大司教